

氏名（本籍）	谷口 圭佑（茨城県）
学位の種類	博士（保健医療科学）
学位記番号	博甲第43号
学位授与年月日	令和4年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	保健医療科学研究科
学位論文題目	医療系学生におけるヘルスリテラシーの現状と関連要因の検討

学位審査委員

主査	茨城県立医療大学教授	博士（心身障害学）	水上 昌文
	茨城県立医療大学准教授	博士（ヒューマン・ケア科学）	松田 智行
	茨城県立医療大学准教授	博士（ヒューマン・ケア科学）	藤田 好彦
	群馬大学教授	博士（医学）	臼田 滋

論文の内容の要旨

近年、我が国の医療従事者の精神的・身体的健康の維持は喫緊の課題となっている。また、理学療法士・作業療法士は、新型コロナウイルス感染症の流行などの二次被害の対応などに追われ、過酷な状況下での労働が強いられている。しかし、今後の医療福祉の担い手である理学療法士・作業療法士が心身の健康を維持しながら業務に従事し続けることは、大きな社会貢献にも繋がることは言うまでもない。そのことから、本論文では、心身の健康問題への対応策として「ヘルスリテラシー」に着目している。ヘルスリテラシーの支援は、健康の維持促進にも大きな貢献をもたらすことで注目されている概念であり、その支援では早期教育の重要性が報告されているが、日本ではヘルスリテラシーが他国と比べて非常に低いことが示されており重要な課題である。

そのような社会背景から、理学療法士・作業療法士のヘルスリテラシーへのアプローチにおいても、専門職になる以前の養成課程の段階からヘルスリテラシー向上に対する働きかけを行う必要性は高く、特に青年期の学生年代では心身の健康に関するトラブルの報告や健康管理の意識の低さが報告されている。しかし、その支援のための参考となる十分な報告はなく、まずヘルスリテラシーの現状と関連要因を検討する必要がある。これらより、理学療法士・作業療法士を目指す医療系学生に対するヘルスリテラシーの早期教育を検討するために、「ヘルスリテラシー」の現状とその関連要因の検討を本論文では目的としている。

本論文は第1から第4の四つの研究により構成されている。

第1研究では、医療系学生における確立された評価指標が示されていないことから、「The14-item Health Literacy Scale for Japanese（以下、HLS-14）」および「The European Health Literacy Survey Questionnaire⁴⁷ 日本語版（以下、HLS-EU-Q47）」の二つのヘルスリテラシーの評価指標の現状と関連要因を調査・分析している。その結果、医療系学生のヘルスリテラシーは不足していること、2つの指標で学年間を比較した結果、HLS-EU-Q47で1学年や2学年に比べて4学年でヘルスリテラシーが高いことが示された。ヘルスリテラシーの2つの尺度の関連要因の検討では、副次的な評価項目として、自己管理能力、運動習慣に対する促進因子・阻害因子に対する認識、メタ認知に関する能力、認知的熟慮性・衝動性、性格傾向などの尺度を用いて調査した。HLS-14の関連要因では、認知的熟慮性—衝動性およびBig Five尺度における「情緒不安定性」が抽出されたが、モデルの決定係数は高くなかった。HLS-EU-Q47の関連要因では、運動習慣の促進因子、学年、MCQ-30「心配事への積極的信念」、Big Five尺度における「情緒不安定性」および「外向性」が抽出され、モデルの決定係数も高いことが示された。以上より、運動習慣に対する認識や認知過程、性格傾向などの関連要因を考慮した介入方法を検討することが必要との示唆を受けた。

第2研究以降では、第1研究において関連要因が多く抽出され、モデルの決定係数が比較的高かったHLS-EU-Q47を主に分析を進めた。まず、HLS-EU-Q47の妥当性を検討し、因子分析の結果、それぞれ「ヘルスプロモーション領域」、「疾病予防領域」、「ヘルスケア領域」の3因子が抽出され、先行研究で示されている領域とほぼ一致することから、HLS-EU-Q47は医療系学生において構成概念妥当性を有する可能性が示された。また、HLS-EU-Q47と各関連要因の下位項目を分析した結果、運動習慣の促進因子では「ストレスを解消し、リラックスできる」、「楽しくエンジョイできる」の心理的効果の下位項目が関連を示していた。

第3研究では、HLS-EU-Q47の下位項目（3つの領域、4つの能力）で点数化を行い、3群（上・中・下位）に分け、各関連要因の群間比較を実施している。領域や能力によって差を示す項目が異なること、特に、運動習慣の促進因子は多くの項目で群間に差があることが認められ、より関連性の強い項目であることを示している。また、性格傾向である「情緒不安定性」および「外向性」は差がある項目に違いがある傾向があった。これらの結果から、ヘルスリテラシーの領域、能力によって介入方法を検討する必要性が示された。

第4研究では、第1～3研究の結果をもとにヘルスリテラシーとその関連要因について、構造方程式モデリングによりモデル化を実施している。どのモデルに対しても、運動習慣の促進因子は関連性が高いことが再確認されている。また、領域モデルでの特徴は、主にヘルスケアには「情緒不安定性」、ヘルスプロモーションには「外向性」で関連が認められていた。各領域で求められる能力に違いがあることを示しており、また、能力モデルでは、入手や理解に対してメタ認知が関連していることを特徴としていた。このことから、ヘルスリテラシーの低下している学生は、より点数が低い領域・能力の関連要因を考慮した介入が効果的である可能性が示唆された。

以上の研究結果から、医療従事者である理学療法士・作業療法士の健康支援の手段として、ヘルスリテラシーの強化を行うにあたっては、学年の変化におけるヘルスリテラ

シーへの影響を踏まえて、より早期に教育を行うことの重要性を再認識する結果となっている。特に、今回の対象である養成校に在籍している学生は、病気や健康支援に関するカリキュラムを受講している者であることから、先行研究で示されている単なる知識付与型の支援では効果として不十分な可能性も否めない。従って、今回の分析から他に関連していた要因も十分に踏まえて、支援内容を検討する必要がある。特に、ヘルスリテラシーに関連する能力である運動習慣の促進に対する認識、メタ認知や個人的要素である性格が関連していることが明らかになり、さらに、精神機能の安定は重要な要素であることが窺えた。そのことから、ヘルスリテラシーへの働きかけの際には、精神機能への働きかけも加味しなければならないと考察しており、今後の医療の担い手である理学療法・作業療法養成校の医療系学生のヘルスリテラシーへの取り組みにより、現場の医療従事者の健康の維持・向上を図ることは新規性および臨床的意義が高い。

また、この研究においては、HLS-EU-Q47 をヘルスリテラシーの評価指標として採用しており、その HLS-EU-Q47 の構成要素である、3つの領域および4つの能力での構造方程式モデリングによる分析を行っている。ヘルスリテラシーは非常に複雑な概念であり、多様な要素からの構成となるため、画一的な介入では限界があることも予想される。以上のことから、個別性の高い介入方法を検討する観点で、ヘルスリテラシーを細分化し、モデル化を行えたことはこの研究の強みである。

また、学校における健康教育の課題に対して、専門職による介入の必要性および関わり方などが体系化されていないなどの課題がある。今後、学校保健に対する理学療法士の役割として、ヘルスリテラシーの向上は重要であると考えられ、この研究結果は、学童期など他の対象への応用も可能であり、健康教育の発展に寄与できる可能性も高い。

審査の結果の要旨

本論文の審査は、令和4年1月28日に公開の場における研究発表と質疑応答を行った後に、上記の審査員4名による協議により行われた。論文審査は、本研究科の指針に従い、創造性・新規性、専門領域の関連性とインパクト、論理性、信頼性・妥当性、論文の表現力、倫理的配慮の観点から行われた。以下に、各観点に関する協議内容の要旨を述べる。

創造性・新規性の点では、医療従事者の身体的・精神的健康を維持する上で国際的に注目されているヘルスリテラシーをテーマに、医療系学生を対象に関連要因を探索的に研究し、その方略を検討する本研究は、先行研究報告が少ないこと、学校教育における教育方略の一助となる点が期待される点が高く評価された。

専門領域の関連性とインパクトの点では、理学療法士・作業療法士養成校における学生を対象に、認知過程や性格傾向に関する調査も含めた本研究が、運動習慣の促進を根幹としたヘルスリテラシー向上に向けた介入戦略を検討する上で意義深く、専門領域との関連性は高く評価された。

論理性の点では、全体の流れは概ね論理的であり、運動習慣の促進がヘルスリテラシー

の向上に向け、重要なことは解析結果からも理解できる一方で、他の関連要因に関する検討における考察が不十分な点や、研究仮説に対する回答が十分に示されていない点、養成校の学習に言及する一方でカリキュラムの内容には言及していない点が指摘されるなど、仮説と調査・分析手法の展開の整合性、研究構成においてより論理的な発展を期待する意見もあった。

信頼性・妥当性の点では、調査項目は一般化されているものであり、その妥当性は保たれているが、主要なアウトカムである HLS_EU_Q47 について、合計点と下位項目の点数のスコアリングに関する説明が一部不足しており、個々の認知過程や性格傾向を加味し、ヘルスリテラシー向上に向けた運動習慣の促進について、具体的な介入方法として示すことにおいて一部課題が残るとの意見があった。

論文の表現力では、基本的な体裁は整えられ、研究の全体像が十分に理解できるものであった。一部に表現が曖昧な点もあるが、ヘルスリテラシーに関する解析のモデル解釈等、丁寧に説明する工夫が見られた点は評価できるとされた。

倫理的配慮は、適切な手続きを踏まえ、また全ての研究が本学倫理委員会の承認を得て実施されており問題ないとされた。

本論文は、医療系学生のヘルスリテラシーと関連要因の関係性を多面的に分析し、新しい知見が得られており、運動習慣の促進がヘルスリテラシーを高める上で有効である点を明らかにした点は意義深く、今後の健康教育の一助となることが期待できる点が評価され、博士の学位取得に十分値すると判断され、審査委員全員の合意の下に、本論文が博士論文として適切であるという評価に至った。